

# マニラールのガンディー非暴力思想継承運動

08H1038 工藤紫織

## はじめに

インド独立の父、マハトマ・ガンディーに関する研究は世界中に数多く存在する。一方、ガンディーの子孫について研究されたものは皆無と言ってよい。本稿では、ガンディーの4人の息子たちの中でも特にガンディーの教えに忠実であったとされる次男マニラールに着目し、彼の生涯とガンディー非暴力思想継承運動がどのようなものであったかを詳細に述べ、彼の活動の意義を論じてゆく。

## 第1章 幼少期～青年期（1892年～1913年）

マニラールは1892年10月28日にインドのポールバンドルで誕生した。しかし、1896年、ガンディーは、息子たちに自分の書いた1万以上の小冊子のコピーを送るのを手伝ってもらうために、妻と息子たちを南アフリカのダーバンに連れていくことにした。南アでは、子供たちは、ガンディーの教育方針に従い学校には行かず、ガンディーのつけた家庭教師のもとで英語を学んだ。また、同居していた人たちや家に来るガンディーの知り合いと話すことによって、様々な宗教や経歴の人と交流したり、ガンディーは使用人を雇ったがガンディーの方針で自分のことは自分でやる生活をしていたりしたため、マニラールは、幼少期から諸宗教を受け入れることができ、カーストの偏見にとらわれることもなかった。

のちに、ガンディーが、自給自足の生活をしながら週刊紙『インディアン・オピニオン』の発行をし、南アフリカにおけるインド人の実情を記事にし、インド人移民の世論を高め、サティヤーグラハ（非暴力・不服従運動）の普及と強化をはかるために建設したフェニックス農場、トルストイ農場では、マニラールは決められた時間に肉体労働、読書や算数の勉強をした。年齢が上がるにつれ普通教育を受けられないことに不満を持つようになったマニラールであったが、父との話し合いにより、和解した。18歳のときにはフェニックス農場の住人全員でトランスヴァールへの不法入国を試み、投獄され重労働を課せられた。このときから、フェニックス農場以外でもサティヤーグラハを行おうとするいくつかのグループが動き出し、マニラールは奮い立たされ、ハンガーストライキを行った。そして、インドでガンディーのサティヤーグラハに初めて参加し、非暴力運動がいかに困難なものか体験した。

このように、マニラールは、幼少期にガンディーの友達や知人と関わることにより、多様な価値観を受け入れ、ガンディーの教育により、規律を守ることの重要性を学んだ。そして、忍耐強い性格を形成したことがうかがえる。

## 第2章 青年期～ガンディー暗殺前（1914年～1946年）

青年になったマニラールは、ガンディーから様々な試練を課される。

マニラールは、インドに一時帰国していたとき、グルクラ（弟子が師の下で生活を共にしながら学ぶ学校）を訪れ、ガンディーの教え通りこれまでの生活スタイルを貫き、子供たちの教育をしていた。だが、ある時、困窮していた兄から金を無心する手紙が届き、ガンディーに金を貸さないよう言われていたにもかかわらず貸してしまったマニラールは、1916年6月、フェニックス農場から追い出され、1年間マドラスの労働者として働くことを命じられた。マドラスに働きに行くにあたって、マニラールはガンディーからマドラスの旅費しか与えられなかった。また、ガンディーの息子であることを明かさないよう命じられた。マニラールは、最初は稼ぎの手段をどうしていいかわからず路頭に迷い、マドラスに着いてからすぐ困窮した。しかも、マドラスではタミル語が公用語なので、マニラールは働きながらタミル語を勉強しなければならなかった。

しかし、マニラールは、タミル語の勉強をしつつ、グルクラでの体験を経て培った、手紡ぎの技術を生かして生計を立てることを決めて、なんとか生活できるようになった。一人で黙々と努力をしていたマニラールであったが、ガンディーと手紙のやり取りはしていた。ガンディーは手紙の中でたびたびマニラールにアドバイスしていた。その手紙の中でガンディーは特に自己抑制の重要性を説いた。

マドラスでの労働を終えたマニラールはすぐに、ガンディーから南アフリカに戻って新聞『インディアン・オピニオン』を編集するよう命じられた。

インディアン・オピニオンは、西洋人のウェストが英語で記事を書いており、その記事をグジャラート語に直すのがマニラールの仕事となった。マニラールは記事を正確に訳すために、辞書を引いて夜遅くまで翻訳に徹した。しかし、マニラールは学校で英語教育を受けたことがないためにこの仕事に多大な不安を抱えていた。そして、英語教育を受けることと英語の勉強が急務だと感じた。しかもウェストはすぐ編集業を離れ、その後はマニラールが編集を行わなければならなかった。

また、仲間との衝突や度重なる財政難で、マニラールはガンディーに何度も手紙で休刊を申し出たが、そのたびに慰留され休刊することはなかった。

辛い毎日の中で、人生のパートナーが欲しいと望み始めたマニラールは34歳で19歳のスシーラーと結婚することになった。だが、この女性はマニラールが望んだ女性ではなくガンディーが選んだ女性であった。しかし、財政難に対してふたりは協力して立ち向かった。また、妻には家事だけを行わせずインディアン・オピニオンの手伝いもさせ、二人はよきパートナーとなっていった。

マニラールのインディアン・オピニオンの編集は長期にわたる戦いとなった。マニラールは、批判されることもしばしばあったが、サティヤグラハの重要性を訴えた。また、少年時代の経験は青年になってからのマニラールの行動の信念となっていることがうかがえる。

### 第3章 ガンディー暗殺から晩年（1946年～1956年）

晩年のマニラールは、宗教的色彩が強くなることで若い時よりも周囲の批判が増え孤立するようになったが孤独に闘い続けた。マニラールは、新聞の発行以外にも、自ら法を破り投獄されることによってサティヤグラハを展開させた。

1940年代後半の南アではアパルトヘイトが整えられていき、アジア人土地保有法とゲットー法ができ、これらの法によりインド人の移動の自由が制限され、居住や通商の範囲が狭められ、不動産の権利に厳しい枠が課された。これゆえ、マニラールは法律に反対し、激しい不服従運動を展開した。

1946年、マニラールは、357人のインド人同志と共にダーバン市有地に許可なく入り逮捕され23日間投獄された。刑務所では、歯ブラシも歯磨き粉もトイレトペーパーさえも与えられなかった。

それでもマニラールは、次々と人種差別法を意図的に打ち破っていった。しかし、1948年から1951年の間は、アフリカ当局はマニラールを逮捕することで彼に注目が集まることを恐れていたため、マニラールは逮捕されなかった。

また1949年、マニラールは国際的な支持を得るため国連を訪問した。そして、シャンティニケタンで行われた世界平和主義会議に出席した。1951年4月には、集団地域法の制定に反対して14日間の断食を行った。これは世界的な注目を集めた。マニラールは断食によって抗議の意思を示し、これによって非暴力で戦うことを内外に示した。また、同年9月21日マニラールは隔離施設法に反対し、ダーバンの図書館の読書室に入り、ヨーロッパ人専用のベンチに腰掛けた。

しかし、再びマニラールが逮捕されるようになり、マニラールは過酷な投獄生活によって体を蝕まれ、脳卒中で倒れてしまった。断食により回復を図ろうとしたがもはや体力はなく、64年で生涯を閉じた。

マニラールはこのように最期まで苦悩して息を引き取ることとなってしまった。マニラールは大衆から見放されたが、あくまでも自分の信念に従って行動した。

#### おわりに

マニラールの非暴力・不服従運動の欠点は、ガンディーと違い大衆を惹きつけられず、晩年孤立してしまったことであろう。この原因はおそらくマニラールの性格によるものだと考えられる。ガンディーも規律に厳しいところはあったが、ユーモアを解することはできた。しかし、マニラールは、インディアン・オピニオンの記事の文体が批判的で率直であったように、自分に合わない者に対しすぐ批判的な態度を示すところがあり、素直な性格であったのでユーモアが通じないところがあったのではないだろうか。

上記の点を考えれば、マニラールの非暴力・不服従運動は失敗したと言えるかもしれない。確かに、その失敗は認めざるを得ないものであるだろう。しかし、その部分だけを考えてマニラールの活動を意味のないものとする考えは間違いであろう。マニラールの運動

にはいくつか意義が見出されると筆者は考える。

まず、マニラールの運動はガンディーの名と思想の拡大につながったと考えられる。現代では、ガンディーは世界的に有名であるが、もし南アフリカでマニラールが活動しなかったら、南アフリカにガンディーの非暴力思想はそれほど広まらなかったのではないだろうか。特に、インディアン・オピニオンの役割は大きかったと考えられる。当時は現代とは違いインターネットがなかった分、新聞は現代と比較にならない程、人々の情報源として大きな役割を果たしていたものと予想できる。

そして、マニラールの考え方はガンディーの理念に近いといえることも、マニラールの運動の意義の一つであろう。

また、マニラールの非暴力・不服従運動は、反アパルトヘイト運動の拡大に大いに貢献したであろう。マニラールの運動は、圧政に対する一つの抵抗の例として示されるものであると筆者は考える。マニラールの運動がアパルトヘイトを崩壊させる一つ的手段として国際社会から注目され、結果としてアパルトヘイトの崩壊につながったことは確かであろう。これらの点を考えれば、マニラールの活動の意義は大きいのではないであろうか。